

# グローバル社会への理解を深める「異文化理解教育」講座1年目の検証 —2020年度学生調査より—

家 入 聖 子

## I. はじめに

グローバル化が進むなか、国際的人材の育成は、地域や大学、社会において急務の課題である。2011年、国家戦略室によって「グローバル人材育成推進会議」が設置され、その後、文部科学省は教育職員免許法の改正（2016年）、同法施行規則の改正（2017年）、学習指導要領の告示（2017年）等を行った。本稿では、これらの国の動向の中でグローバルな社会への理解を深めるための「異文化理解教育」に焦点を当て、その重要性、必要性がどのように示されてきたかをたどる。

そして、これらの時代背景を経て、2020年4月、神戸女子大学では文学部教育学科義務教育コースにおいて講座「異文化理解教育」を開講した。大学に入学して間もない学生たちは「異文化」をどのように捉えているのか。また、授業を通して「異文化」をどのように理解したのか。本稿では、履修生を対象に実施した調査（毎時授業振り返りレポート、年度末授業アンケート）を通して講座初年度の授業を振り返り、異文化理解教育の必要性について検証するものである。

なお、2020年度は日本のみならず地球規模で新型コロナウイルスが猛威を振るい、感染症拡大予防のため教育現場は一変し、新たに様々な対策を講じた1年であったことを特筆する。

## II. 「異文化理解教育」講座開講にいたるまでの経緯

文部科学省は平成29年告示の学習指導要領で、新たに取り組む7項目の中に外国語教育を提示し、小学校5、6年生は教科「外国語」、3、4年生は「外国語活動」を始めることとなった。小学校学習指導要領では、言語を習得することに加えて、多様な考え方やその背景にある文化に対して関心を持ち、国際理解を深めることを、次のように示した。（第10節外国語 第2「各言語の目標及び内容」3指導計画の作成と内容の取扱い（3）教材について）

英語を使用している人々を中心とする世界の人々や日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史、伝統文化、自然などに関するものの中から、児童の発達の段階や興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるものとし、次の観点に配慮すること。

- (ア) 多様な考え方に対する理解を深めさせ、公正な判断力を養い豊かな心情を育てることに役立つこと。
- (イ) 我が国の文化や、英語の背景にある文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養うことに役立つこと。
- (ウ) 広い視野から国際理解を深め、国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うことに役立つこと。

※中学校学習指導要領では、下線部が「効果的に」と記されている。（下線は筆者による）

学習指導要領の改訂に伴い、教育職員免許法の改正（平成 28 年 11 月）、及び同法施行規則の改正（平成 29 年 11 月）により大学における教職課程で履修すべき事項を約 20 年ぶりに全面的に見直した。小学校の外国語（英語）教育が新たに教育課程に加えられた。

小学校教員養成課程の外国語（英語）コアカリキュラムでは、英語に関する背景的な知識として、学習項目に「異文化理解」を示し、「異文化理解に関する事柄について理解する」を到達目標とした。また、中・高等学校教員養成課程の外国語（英語）コアカリキュラムでは、〔1〕生徒の資質・能力を高める指導の中で学習項目に「異文化理解に関する指導」を示し、「異文化理解に関する指導について理解し、授業指導に生かすことができる」を到達目標とした。

さらに〔2〕英語科に関する専門的事項 4 に異文化理解を挙げ、次のように目標等を定めた。

#### 4 異文化理解

##### 【全体目標】

社会や世界との関わりの中で、他者とのコミュニケーションを行う力を育成する観点から、外国語やその背景にある文化の多様性及び異文化コミュニケーションの現状と課題について学ぶ。併せて、英語が使われている国・地域の文化を通じて、英語による表現力への理解を深め、中学校及び高等学校における外国語科の授業に資する知見を身に付ける。

##### 【学習内容】

###### ◇学習項目

- 1 異文化コミュニケーション
- 2 異文化交流
- 3 英語が使われている国・地域の歴史・社会・文化

###### ◇到達目標

- 1) 世界の文化の多様性及び異文化コミュニケーションの現状と課題を理解している。
- 2) 多様な文化的背景を持った人々との交流を通して、文化の多様性及び異文化交流の意義について体験的に理解している。
- 3) 英語が使われている国・地域の歴史・社会・文化について基本的な内容を理解している。

このような時代背景により、神戸女子大学においても教育課程の改革を行うこととなった。従来、文学部教育学科に設置していた幼児教育コース、初等教育コース、心理学コースに加え、2020 年度に義務教育コースを新設した。義務教育コースのねらいは、主として小学校教諭になることをめざしながら（小学校教諭一種免許状取得）、同時に中学校教諭一種免許状（英語）を取得することである。そしてコース専攻専門科目として「異文化理解教育」を設置した。

### Ⅲ. 授業を始めるにあたって

#### 1. 授業到達目標と授業計画

2020 年度「異文化理解教育」は、1 回生必修教科 2 単位、後期 15 回の講座として開設した。履修生は 21 名。テーマを「グローバル社会への理解を深める」と設定し、授業到達目標を次のように定めた。

目標①：世界の文化の多様性や異文化コミュニケーションの現状と課題を理解する

目標②：英語が使われている国や地域の歴史、社会、文化について基本的な内容を理解する

目標③：多様な文化的背景を持った人々との交流を通して、文化の多様性及び異文化交流の意義について体験的に理解する

次いで2020年度シラバスを設定した。しかしながら、新年度がスタートした2020年4月は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため全国に緊急事態宣言発令中であり、大学全体が授業方法やシラバスを急遽大きく見直さざるを得ない状況となった。9月スタートの後期「異文化理解教育」講座も例外ではなく、授業はすべて遠隔授業に変更することとなった。また、到達目標を③に即して当初計画していた神戸市内在住の様々な国籍の外国人との交流イベントは相次いで中止となり、最終的にシラバスは以下のように設定し実施した。

第1回：オリエンテーション

第2回：文化とは（1）文化の多様化

第3回：文化とは（2）トータルカルチャーとサブカルチャー

第4回：文化とは（3）異文化適応

第5回：発表「わたしの異文化体験」

第6回：英語が使われている国や地域を中心とした異文化理解（1）行動・視点・環境

第7回：英語が使われている国や地域を中心とした異文化理解（2）固定観念

第8回：英語が使われている国や地域を中心とした異文化理解（3）差別

第9回：英語が使われている国や地域を中心とした異文化理解（4）価値観

第10回：非言語コミュニケーション

第11回：多文化共生社会

第12回：交流体験学習（1）「English Day Camp」＜神戸市教育委員会主催＞

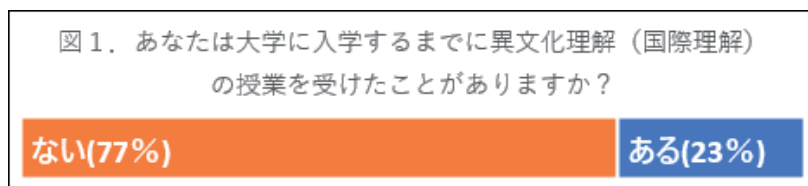
第13回：交流体験学習（2）「English Day Camp」＜神戸市教育委員会主催＞

第14回：発表「わたしの異文化理解授業」

第15回：まとめ発表「異文化理解教育の学びを終えて」

## 2. 履修生の背景

まず、入学までの異文化理解教育について授業経験及び外国滞在経験の有無について調査した。



授業経験がある学生は5名（23%）であり（図1）、内訳は中学校で1名、高校で3名が社会や英語の授業で数時間学習した。また、高等学校で科目「異文化コミュニケーション」を履修した学生は「高校

では異文化理解の基礎というよりは、このような異文化がありますよというのを ALT がすべて英語で授業を行っていました。英語力の向上を重視していました。対して、異文化理解教育では、異文化の基礎から入り、異文化を理解するためにはどうすると良いのか根本的なところを学べた」と述べた。このように履修生の 77% は異文化理解に関する学びを大学で初めて受講するという状況であった。

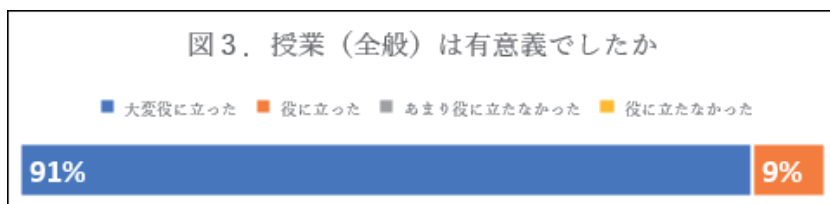


海外渡航歴がある学生は履修生の 3 分の 1 にあたる 7 名であった (図 2)。内訳は観光旅行 2 名、修学旅行 4 名、留学 2 名、研修 1 名である。訪問先はグアム、香港、スロバキア、オーストリア、ベトナム、ニュージーランド、台湾 2 名、米国 3 名であった。複数の国を訪れた学生は、次のように述べた。「中学生の時に約 1 週間の海外研修でアメリカに行き、高等学校では約 10 か月間、留学でニュージーランドに行きました。そのため、異文化について少しは周りよりも理解できていると思っていました。確かに文化の異なりを見つけ出すことができ、その違いを受け入れることはしていましたが、この講義で本当の意味の『異文化理解』を知ることができました。私が今までしてきたことは『理解』ではなく『認知』であると気付かされました。」

この調査結果から、大学入学以前に異文化理解の授業、海外渡航の両体験ともない学生は 11 名となり、クラスの約半数を占めていることがわかる。本講座は文字通り異文化理解教育入門の授業であり、この実態が 5 か月後のレポートにおける「たくさんの驚きや発見があった」「異文化に対する認識が変わった」「視野が広がり柔軟な考えを持てるようになった」という記述の素地となっていると推測される。

#### IV. 授業

##### 1. 授業全般

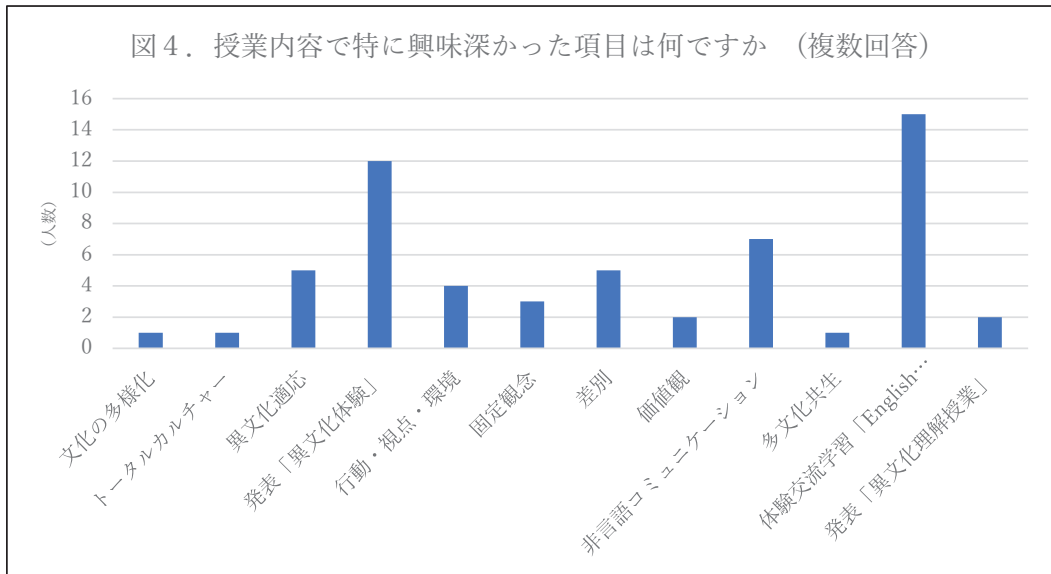


新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、全 13 回の講義及び発表はすべて遠隔授業の形態をとった。以下に、それぞれの授業に関しての学生調査結果の自由記述を記す。

**自由記述** (自由記述(抜粋)は原文のまま。以下同様)

- ・ 自国や他国の異文化について学習してきたが、この授業でしか学ぶことができないことが多くあり、非常に勉強になった。これからも自分の様々な引出しを増やすためにも、しっかり学習していきたい。
- ・ はじめは必修科目だからこの授業を履修したという思いが強かったですが、必修や選択など関係なく、私にとって大変有益な授業でした。全回の授業の内容を忘れないようにして、これからも異文化理解

の諸問題について考えていこうと思います。



次に、図4にそって各授業項目についての自由記述を記す。

#### 自由記述

##### ◆文化の多様化

- ・学校教育について、昔は男子は技術を習い、調理実習などの家庭科は女子のみが履修していた。このことは祖父からも聞いたことがあり驚いた。私たちが現在常識であると考えていることや流行なども、将来の子どもたちにとっては異文化なのだと考えると面白い。私たちの文化を大切に後世にも残していくために、自分に子どもができれば伝承していきたいと思う。
- ・「異文化理解力とは違いを面白いがるセンスである」という田岡恵さんの言葉もとても興味深かった。違いを受け入れることは大変難しいことであるが、それを面白いと受け止める感覚はとても素晴らしく貴重であると感じた。

##### ◆トータルカルチャーとサブカルチャー

- ・同じ国の人でもトータルカルチャーは同じだが、小さな文化であるサブカルチャーが違うということはよくある。ひとりひとりが違う文化を持っており、誰もが「多文化人」であるという意識を持つことが異文化理解に繋がるのだと感じた。
- ・文化には6つの特徴があることを知って驚くことが非常に多く、文化というものの大きさを改めて感じさせられました。文化を学習し伝達するだけでなく、中身まで正確に知って未来に繋げていくことの大切さを感じました。

##### ◆異文化適応

- ・私自身、大学から地元を離れて未知の世界である関西圏に来て不安でいっぱいでした。地元との言葉や文化の違いに寂しくなったり不安になったりしました。そんなときに異文化理解教育の授業で

異文化適応について学び、自分は今異文化を体験し、今どの段階にいるのかが分かりました。授業内容がまさに自分のことであったためとても共感でき、自分自身を客観視できました。パツカリ穴が開いていた心が救われたような気がしました。

- ・異文化適応には性差と年代差があると知った。海外在留邦人数は、近年では女性の方が多いことを初めて知り、やはり女性の社会進出がすごく進んでいると感じた。そして、特に若い日本人女性が国連や開発援助などボランティア活動を行っているという事実を聞いて、とても驚いた。

#### ◆行動・視点・環境

- ・今回の授業で一番驚いたことは、国・地域によって虹の色の数の認識が違うということである。どの国でも虹を見るとカラフルで7色に見えるけど勝手に決めつけていたので驚いた。明るい色/暗い色など、この二つの識別で虹を見ている地域も存在するというのに驚きを隠せなかった。
- ・行動での文化の違いでは、「列」について大変興味を持った。国によって文化の違いはあるし、私たちが当たり前だと思っている物でも他の国ではそうではないので、外国人とコミュニケーションをとるためには文化の違いをしっかりと理解し、生活を共にしていかななくてはならないと思った。

#### ◆固定観念（異文化の認識）

- ・アメリカ同時多発テロ事件について中学・高校の授業で習ってはいた。しかし、実際に映像を見たのは初めてで、これが本当に人間の起こしたことだと考えるととても怖いと感じた。その後、授業で習ったことを振り返ると、犯人であるイスラム教徒の思想が少し分かり、新たな見方ができた。固定概念とは改めて怖い場合もあると感じた。
- ・中学校時代、話し合いをしているときに、協調性が無いなと感じた友人がいた。その時に「この子は一人っ子だから仕方ないか」と考えた。一人っ子はみな協調性が無いと捉えていた。しかし、このような考え方は、教員を目指す身としてあってはならないと、今回の授業を通して感じた。ステレオタイプによって相手の人柄や行動を予想することができるという利点もあるが、ステレオタイプを絶対視せず、一般化することを忘れないでいたいと思った。

#### ◆差別

- ・一番印象に残っているのは、社会差別における例である。「世界人口白書」の男児選好、児童婚、女性性器切除の話を知るととても心が苦しかった。生まれた地域や国が違うだけの同じ女の子が、存在から否定されていたのだと思うと、鉛を飲まされたような気分だった。
- ・現在、新型コロナウイルス感染症が世界中で流行している中、多くの差別が生まれている。自分の地元でも、家を特定されて差別されたり、石を投げられたりと大変なことになっていた。昔から多くの感染症があり差別もあるため、一生差別はなくならないと思う。どれだけ自分たちが正しい知識を持っているかが差別を減らせる唯一のことなのではないかと思う。

#### ◆価値観

- ・性善説・性悪説の学びの中で、例として挙げられた日本と欧米の道徳観念の違いを見て、あまりにも真逆で驚いた。子供は純真無垢であること、子供の多少のわがままは大目に見ることは世界共通であると考えていたので、こんなところにまで国の文化が刷り込まれているのかと少しショックだ



った。宗教による考えの違いは大きいなど改めて感じた。

- ・講義でワークショップを行い、私はすべての項目において日本の価値観を持っていると分かった。この結果は少しショックでした。異文化についてたくさん学んできて、自分の中に取り入れていたつもりでしたが、まだまだ理解できていないことを再認識しました。もっと視野を広げて、様々な考え方を取り入れられるように生活していきたいと思います。

#### ◆非言語コミュニケーション

- ・コミュニケーションの主は言葉だと考えていた。しかし、言われてみれば人が話すとき、言葉以外にも身振り手振りを使用することや声の大小、スピードなどたくさんの行動をとっている。非言語コミュニケーションで聞き手への伝わり方は異なると理解した。これからの生活で、人の前に立って自分の意見を発する場面が増えてくる。そんなときに、どうすれば聞き手に伝えられるか、非言語コミュニケーションを意識し活用して、人の心を動かせるような話し方ができるようになりたい。
- ・他国とのハンドサインやコミュニケーションの解釈の違いについても動画で見て、とても興味深かった。今後教師になった際、外国育ちの児童などへの対応を誤らないようにしたい。そのためには、児童について深く知り、さらに他国の文化についても深く知っていかなければならないと感じた。

#### ◆多文化共生

- ・神戸市中央区で多文化共生社会実現に向けて様々な取り組みがされていることを知り、私の住む地域ではどのような取り組みをしているのか気になって調べてみた。神戸市中央区のような「多文化共生社会実現に向けて」という記事はなく失望した。しかし、国際交流協会というものがあり、外国人支援や多文化理解の啓発、国際交流事業の実施をしている。地域イベントがあれば積極的に参加したいと思った。
- ・価値観の違いを理解した先に、多文化共生社会を実現できると思う。多文化共生社会を実現するためには、「多様性」を重視する必要がある。日本人だけの社会から多様な人々が住む社会へ意識を変える。そして、国際化に向けてのさらなる一步を踏み出すことが重要である。異文化コミュニケーションの正しい知識、多種多様な人々と対等にコミュニケーションがとれる能力を身につけたい。

## 2. 発表

図 7. 発表「異文化体験」「異文化理解授業」は有益でしたか。



遠隔授業の形態を保持しながら、学生による2回の発表を実施した。1回目は大学入学以前の異文化体験の発表で、2回目は将来教員となった際に取り組みたい異文化理解授業のテーマの発表である。

<表1> 発表：テーマ「わたしの異文化体験」2020.10.1

地域	内容	体験場面	人数
日本	食文化	家族	1
	風習	関東と関西	1
外国	食文化	旅行、留学	4
		留学生交流、観光客	3
	服装	観光客	2
	伝統文化	修学旅行	2
	治安	親族	1
	生活様式	留学	1
	挨拶	留学生交流	1
	常識	留学生交流	1
	学校設備	留学生交流	1
	異文化を感じない		留学生交流

名)と半数を占めている。その一方、外国人との交流はありながらも異文化を認識せず、積極的に接する態度が培われていなかった学生の実態も見受けられた。ある学生は学年末調査で「この異文化の授業を通して日本人と外国人の方々に様々な違いがあることを学びましたが、私は異文化理解教育の授業を受けるまで外国人の方に対して何か感じることはありませんでした」と述べている。

表2は、第13回授業でまとめた学生の授業テーマである。9月から授業を進める中で「他の人の意見を聞いて目が開かれた」「興味があったので調べてみた」「授業内容について家族と話し合っている」等の

<表2> 発表：テーマ「わたしの異文化理解授業」2021.1.14

テーマ	主なトピックス	人数
行動・視点・環境	傘、行列、虹の色、マスク	4
マナー	挨拶、チップ、ノック	4
ジェスチャー	相づち、旅行	2
宗教	差別、戦争	2
食文化	食べ方、食事方法	2
価値観	入浴	1
ステレオタイプ	固定観念	1
対人距離	パーソナルエリア	1
法律	ユニークな法律	1
学校生活	昼食、学期制	1
行事	クリスマス	1
伝統文化	文様	1

表1は、第2回授業でまとめた学生の異文化体験である。在留外国人総数は年々増加し、2019年12月の政府統計では過去最高の290万人を上回っている。履修生の中には、これまでに渡航経験のない学生たちが67%いるが(図2)、彼らも全員が在留外国人と何らかの形で接している。小中高校生時代に外国からの留学生との交流を経験したり、生活圏内で外国からの旅行者や労働者の方々を見かけたりして異文化を身近に感じていることがわかる。取り上げた場面をみると、食文化・服装など「見える文化」が48%(10

を聞いて目が開かれた」「興味があったので調べてみた」「授業内容について家族と話し合っている」等の積極的な感想が毎回見られるようになってきた。そこで、13回の授業を通して「学生は異文化理解に関して、将来を担う子供たちに対して何を伝えたいと考えるようになったのか?」を知るために発表の機会を設定した。学生に提示した発表条件は、中学校英語教員として異文化理解教育に関する授業を1コマ(50分)で展開する場合のテーマを紹介する、である。



実施した結果は表2のように、テーマは12種類に渡っており、その選択内容は「見える文化」から「見えない文化」への気付き、視野の広がりが見受けられる。経験値が低く、知識理解も限られている学生たちであるが、9月授業開始時（表1）と比較すると学びの成長が顕著に表れていると言える。

### 3. 遠隔授業における対応・工夫



対面でのグループワーク、ディスカッションの実施が困難であったため、学生の意見の交換の機会を確保するために、毎回授業感想を課題としてレポート提出させ、その意見を次授業の冒頭に紹介した。授業アンケート結果によると（図5）、この手法は同時性または即応性を持つ双方向性を有し、面接授業に相当する教育効果を上げることができたと言える。

#### 自由記述

- ・毎回の授業で「振り返りレポート」の紹介があり、同じクラスの仲間がどのように考えているかを知れたり、自分では考えることのできない内容が知れたりなど毎回すごく勉強になった。同じ授業を受講しても個人個人で理解の仕方は全然違うことを知り驚いた。講義で学ぶことも大切だが、同じクラスの仲間から学ぶこともすごく大切であり、授業とはプラスして学ぶことができた。
- ・みんなの意見が聞けたことはとてもよかった。先生と学生全員で授業を受けているようで、とても楽しい授業になりました。
- ・私は、元来自分の意見を考え、それを文章や発表を通して表すのが苦手だ。しかし、異文化理解教育の授業を受けていくにつれ自分の意見を持つことが当たり前になり、その次の授業で自分の意見が紹介されると大変うれしくなった。レポート作成には苦労したが、自分自身の中で「見える変化」があったので頑張ってよかったと感じ、今後の授業も頑張ろうと感じた。
- ・毎回の授業で同じコースの人たちの意見を聞けることが嬉しかった。オンラインのため一人で学んでおり、他者の考えを聞くことがなく偏った意見になってしまうが、他の視点や価値観の考えを聞けることは、自分自身の視野が広がることに繋がった。同じ夢を志す仲間との学びを大切にしたい。



音楽を通して世界の文化を知るため、授業中盤に毎回 Break Time を設け英語の歌を紹介した。2020

年度版の小中学校各社の英語教科書に掲載されている曲と、12月にはクリスマスキャロルの動画を配信した。筆者は1995年1月阪神・淡路大震災の発生直後に作られた曲『しあわせ運べるように』が英訳され、世界で歌い継がれている様子が小学校の英語教科書に掲載されていることに感銘を受けた。

< 曲目 >

Imagine / Change the World / We are the World / Hello Good-bye / Stand By Me / I just called to say I Love You / Heal The World / Take Me Home, Country Roads / Joy to the World / Bring Happiness to the World

#### 自由記述

- ・ブレイクタイムに流れる曲がとても楽しみだった。IMAGINE は一度聞いたことがあったので、久しぶりに聴いて懐かしい感じがしました。UNICEF 版と国連本部での Shakira 版の2つのバージョンが聴けたのも興味深かったです。
- ・授業の間に聞いた Hello-Goodbye という曲は、高校生時代にクラスみんなで覚えた曲であったので画面越しでも一緒に歌い、とても楽しい時を過ごせた。教師になるにあたって、英語の歌は沢山知っていた方が良いので、この機会にもっと YouTube などで積極的に聞いていこうと思った。

#### 4. 交流体験学習

交流体験学習は、シラバス到達目標の一つである「多様な文化的背景を持った人々との交流を通して、文化の多様性及び異文化交流の意義について体験的に理解する」に基づき設定した。年度当初には複数の交流体験を計画していたが、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、神戸市では多くの交流イベントが中止となった。小学校におけるこの事業も直近まで開催が危ぶまれたが、12月に無事実施することができた。6ヶ国18名の Assistant Language Teacher (ALT) との異文化交流はもちろんのこと、学校現場の児童・教師との交流を通して学生が得たものは実に多く(図4)、快く受け入れてくださった神戸市教育委員会事務局及び神戸市立井吹東小学校に心から感謝する。

神戸市は「国際都市神戸にふさわしい特色ある英語教育」を推進するため、神戸市教育課程基準「神戸市の目標と今後の展開」の中で次のように述べている。「小学校学習指導要領の目標は『コミュニケーション能力の素地・基礎を養う』ことであるが、神戸市が目標とする具体的な姿としては、自分のことや自分の気持ちを英語で伝えることができる『英語に親しむ小学生』を描いている。外国人に臆することなく、知っている英語を使ってコミュニケーションをとろうとする児童である。中学校では、より具体的な姿として、互いの考えや気持ちを英語で伝え合うことができる『英語が話せる中学生』を目標としている。」その具現として、国のJETプログラムによる外国人英語指導助手ALTを毎年100名以上配置し、通常授業におけるTeam Teachingに加えて様々なプログラムを企画、実施している。本事業はその一環として実施されたものである。

## English Day Camp at School

趣旨： 学校を外国に見立て、ALT による英語中心のプログラムを小学生が体験する

日時： 2020年12月11日（金）

場所： 神戸市立井吹東小学校

参加： 小学校5年生\*150名、ALT\*18名（出身：6か国）

所管： 神戸市教育委員会事務局学校教育部教科指導課

プログラム： ※ 大学生参加（1）～（3）

### （1）Opening Ceremony

ALT との出会い

### （2）Passport Time

グループに分かれて自己紹介&パスポートタイム

### （3）Activity 1 <Let's play with ALTs>

ALT 主催の活動をグループ毎に回り楽しむ！

- ・オリンピックゲーム（アーチェリー、バスケットボール、野球等）
- ・「何ができるかな!？」
- ・「学校内の何のことを言っているでしょう」
- ・「オリジナルポストカード」
- ・クイズ「国」
- ・「曜日を言ってみよう」
- ・「みんなの好きなものを知ろう」
- ・「みんなの誕生日を知ろう」
- ・ALT に質問コーナー
- ・早口言葉
- ・英語の歌
- ・ABC 長縄
- ・「様々な言葉に親しもう」
- ・「友達をゴールへと導こう」

### （4）Lunch Time

昼の放送で ALT の話を聞いたり、世界の国々の歌や文化を知ったりする

### （5）Activity 2 <Challenge Time>

小学生が ALT に紹介する<学校、日本、自分たちの町>

### （6）Goodbye & Thank you Ceremony

各グループで ALT に感謝を伝える

図 8. 交流体験学習「English Day Camp」は有益でしたか。

■ 大変役に立った ■ 役に立った ■ あまり役に立たなかった ■ 役に立たなかった

91%

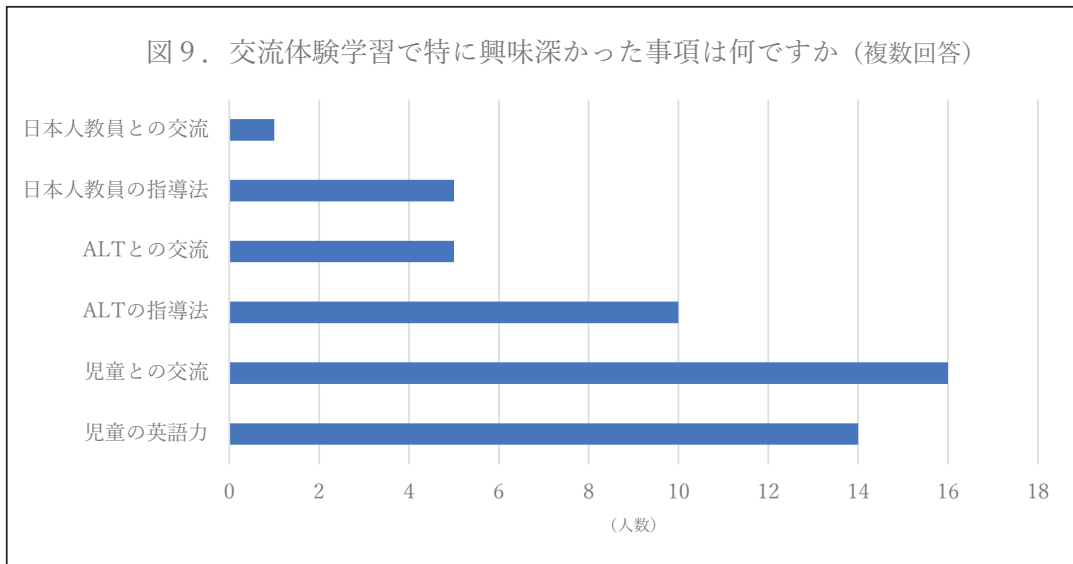
9%

#### 自由記述

- ・とても貴重な経験になった。実際に学校に行って小学生や教員の方々やALTの外国人の方たちと関わって、教師について深く考えるようになりました。教師になったときどんな先生になりたいのか、自分が先生だったらどう対処するだろうと考えることが多くありました。
- ・3年後には、学校現場で自分も指導する立場になる。時の流れについていくのは難しいが、自分が受けてきた教育が絶対ではないことを念頭に置き、変わり続ける教育に対応できるようになりたい。英

語教育は、特にその対応力が必要だと感じた。

- ・私が小学校の先生になったら、子供たちの英語力、コミュニケーション能力、英語や異文化に対する関心などを高める最大限の授業を作り上げたいと思いました。この交流体験学習を通してまた一つ目標ができました。



#### ◆児童との交流

- ・活動を通して仲良くなりたかったので、「名前を言う」「挨拶をする」を試みてみた。するとみんな英語できちんと受け答えしてくれてとても嬉しかった。次第に「次ここ行くよ」とか「どこ行きたい?」と児童の方から話しかけてくれてとても楽しかった。実際に学校で働いている先生方も見ることができて、子供に囲まれている先生方を見ると「私もこんな先生になりたいな」と強く思った。一緒に活動に参加させてもらって英語に触れたことで、「英語ってこんなに楽しかったっけ?」と思った。
- ・ALTに何とかして自分の想いを伝えようとする児童たちの姿、そして自分の想いが伝わった時の嬉しそうな顔は脳裏に焼き付いています。今回のイベントは私が一番学ばせてもらったくらい、本当に、本当に勉強できる場でした。大きさかもしれませんが、この感動を生涯忘れず胸に置いて立派な教師になります。
- ・最初の不安とは別に、小学生はすごく可愛く、元気で、沢山学校のことなどをお話ししてくれて、私のことを「先生」と呼んでくれた時は本当に嬉しかったです。また、小学生がゲームを楽しそうにしてくれるだけで、見るこちら側も楽しい気持ちになることができました。このたった2時間で楽しい思い出も沢山でき、早く先生になりたい、頑張ろう、そう強く思いました。そして同時に英語をもっともっと積極的に勉強したいと思い、とてもいい刺激になった体験学習でした。

#### ◆児童の英語力

- ・All Englishで「身長は? 好きな食べ物は? 好きなアイドルは?」など、ジェスチャーを交え

ながら、英語で話しかけてくれる児童が非常に多く驚いた。早い段階で英語を習得していることで、迷いなく口に出すことができているのだと感心した。私は話すことよりも書くことを中心として英語に親しんできたため「文法が間違っている、英単語が分からない」などと考えてしまい、英語で思いを伝えることができなくなっていた。しかし、伝えたいという気持ちを持ち、間違いを恐れず口に出すことで、大抵のことは伝わるのだと学んだ。コミュニケーションの原点を5年生の姿を通して改めて感じた。

- ・驚いたことは、児童の高い英語のスキルである。通りすがりの人にもハローと積極的にコミュニケーションをとったり、自己紹介を英語で淡々と話すことができたり、私が小学生のときは考えもしなかったことを簡単にやっていてとても驚いた。また、ALTの先生方によるゲームも、知らず知らずのうちに楽しめて英語に触れられる姿はすごいと感じた。私自身も英語は今まで学んでいたが、文法のような英語の形しか学んでこなかった。今の子供たちはこのグローバル化する社会に対応した英語力を身につけているのだと感じ、そのような子供たちに英語を教えるにはよりたくさんの知識が必要であり、教員も学び続けなければならないと感じた。

#### ◆ALTとの交流

- ・ALTの先生とコミュニケーションをとることができて嬉しく思う。アクティビティ交代の時間が迫ってきた時に「このグループは2つ目のグループ？ここは参加しているグループの子の待機場所だからあっち側で待ってね」とか、「この2つのグループは他のゲームはもう終わったの？」など英語で声をかけられてとても焦ったし緊張したが、聞き取れたことと自分の英語が伝わったことに、感動し英語教員を目指す身として自信につながった。
- ・ALTの先生が、児童だけではなく私にも同じように質問をしてくださったのですが、答えるときに簡単な英単語しか出てこず「もっと自分自身の英語の力を伸ばさないといけない」と思いました。

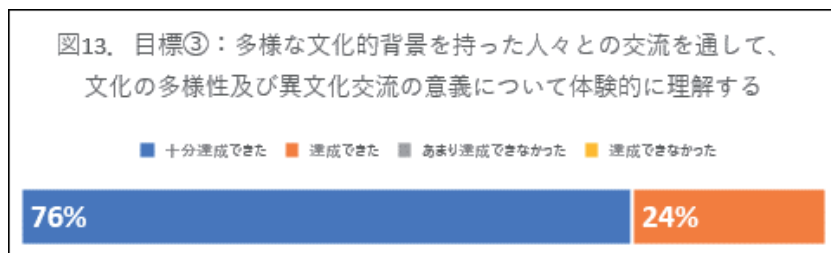
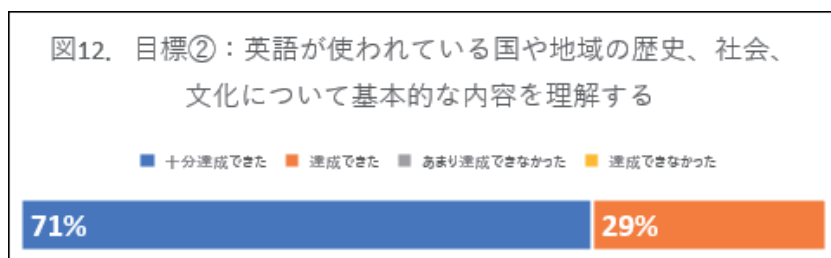
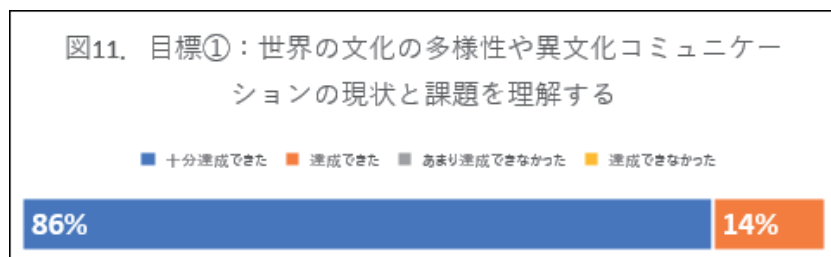
#### ◆ALTの指導法

- ・ALTの先生方は、やはり日本人にはあまりない表現力があり、身振り手振りで自分自身を表現しながら、小学生に興味を持ってもらえるような自己紹介をされていた。私は「英語で自己紹介をして」と言われると、英語を話すことに一生懸命になってしまい、声が小さくなってしまう。しかし、小学生の前で英語を話すときに求められるのは、まずは大きな声で楽しそうに英語を表現することだと思った。ALTの先生方を見習って、自分を表現する力をこれから身につけていきたい。
- ・様々な国出身のALTの先生達が自己紹介をする様子を見て「人前で話すことに慣れていて上手だな」と思いました。笑いをとりながら子供達が理解でき楽しめるような簡単な自己紹介をしている姿を見て「自分もあんな風に人前で話せるようになりたい」と思いました。
- ・ALTの先生の接し方も私にとって新しい学びでした。すごく明るくて、子供たちに伝わるようにゆっくり話し、英語を1つのコミュニケーションツールとして楽しんでいる様子でした。私自身も経験したことのないアクティビティもあり、教員になったら使ってみたいと思いました。先生がこのように接してくれることは、英語に対しての苦手意識も芽生えにくいだろうし、何より楽しく英語を勉強できるのだらうと思いました。

## V. テーマ及び授業到達目標

### 1. テーマ／到達目標

全15回の授業を終えて、当初に設定したシラバス記載のテーマ及び授業到達目標について達成状況を問うた(図10、11、12、13)。4項目のいずれも「十分達成できた」「達成できた」を合計すると達成率100%であり、全学生が「異文化理解教育」講座の内容を理解し、知的関心を高めることに資する学びができたと回答している。



### 2. 「異文化」概念の変容

図11において、履修生の86%が「世界の文化の多様性や異文化コミュニケーションの現状と課題」を十分理解することができたと回答し、さらに自由記述の中に、この学びを通して「異文化」概念の変



容を感じていると述べた学生が多数いたことは特筆に値する。既出第2項で記したように、履修生の77%が、本講座において初めて異文化理解教育を学んだということもその一因であると考えられる。

#### 自由記述

- ・今まで「異文化」と聞くと外国の文化を思い浮かべていたが、外国の文化だけではなく自分以外の人間はすべて異文化なのだと認識しました。日本国内でも、東日本と西日本の文化を比較すると大きな違いが見られます。そして、これだけメディアが発達している今日、世界の状況や文化に目を向けずに自国の文化のみで生きていくことはもうできません。私たちはお互いの文化を尊重することが今まで以上に重要になることが分かりました。
- ・この授業を通して異文化理解教育に対する考えが大きく変わりました。その中でも自国と他国との文化の違いを受け止めていかなければならないと最も強く思いました。これまでは自分の心のどこかで自国の文化が一番正しく、常識があると考えていました。他国と自国の文化が違えば「他国の文化は非常識である」と、どこかで差別をしていました。しかし、そのような差別の考えも変わりました。
- ・異文化理解教育を学んで感じたことは、「今まで自分が生きてきた世界が全てではない」ということだ。人は誰しも個人が持っている価値観や人生観を絶対視しがちである。私もこの授業を学ぶまではそうであった。しかし、私の一番身近な存在である家族ですらも「異なる文化を持っている」と学習し、その考え方がガラリと変化した。相手を受け入れる心の広さをも培っていかねばいけなと感じた。自分と異なる意見や価値観ですれ違ったとしても、少しでも相手を認め「こういう考えがあるんだな」と知る力を異文化を通して学んだ。固定観念を取り払い、認め合うことが重要であると感じた。
- ・異文化理解教育を受講して、自分の考え方の幅が広がったことを一番強く感じている。日本の中で生活してきたからこそ形成されている当たり前、固定観念、一定の視点など、多くのことを見つめ直すことができた。異文化理解の第一歩は異なる文化の存在に気づくことだと学び、国内外問わず多くの異文化を知ったうえで考えたことも多々あった。

### 3. 今後の学び

前項2.に加えて、多くの学生が異文化理解について今後もさらに学びを深めたいと述べており、小学校・中学校教員、ボランティア活動等、明確な目標を定めて歩もうとしている姿がうかがえる。

#### 自由記述

- ・異文化理解の授業を終えて、気づくことができたのは無知が一番怖いということです。この授業で学んだ内容は知らないことばかりで、知っているのは「見える文化」の氷山の一角だけだったと今振り返ると思います。世界史や地理の授業で知ったわかりやすい文化だけで、全てを分かったかのように自分で思っていました。そこで、この授業でいろいろな情報を提供してもらい知ってから、さらに自分の知識にするために調べたり、自分の経験に当てはめることはできないか毎回考えたりしながら授業を受けるようになりました。また、授業外でも異文化理解に関連したニュースがあるときは興味を

持ってみるようになりました。身近ではなかった他国の文化や、慣習を少しでも知ることによって自分との当たり前の違いを理解し、変な文化があると思わずに、そんな文化もあるのだなと思えるようになりました。これからも気になった異文化の問題について調べて深めたいと思いました。

- ・近年多くの女性が海外で活躍している現状を学習して本当に素晴らしいと思いました。自国を抜け出し異国の難民を救いたいという思いがひしひしと伝わってきて感動しました。私もこの先ボランティア活動などを通して、難民の子供たちの援助を行い一人でも助けたいと思いました。そのためには自分自身がしっかりと異文化を理解する必要があります。もっと異文化について学びたいと思いました。
- ・この授業を受ける前と受けた今とでは、異文化理解に対する知識量は確実に異なっている。また、自国他国を問わず、多種多様な人々と対等にコミュニケーションをとろうと試みるようになった。私自身が国際人材の一員になれるよう日頃から異文化に対する意識を変えていきたい。そして、将来小学校教員になって子どもたちに異文化理解教育を進め、今よりもっと社会から必要とされる国際的な人を育てたい。
- ・異文化理解教育授業を通して、今まで知らなかったことを知れて非常に嬉しく、外国への関心がより強くなった。現在は新型コロナウイルス感染症のため厳しい状況だが、大学生の間に必ず外国に行き、文化の違いを自分の肌で感じたい。そして、将来、日本人学校の教員になるという夢を叶えたい。

## VI おわりに

神戸女子大学で異文化理解教育の講座が開講された 2020 年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けた時期であった。年度スタート時の 2020 年 4 月は緊急事態宣言発令中（全国）であり、最終授業を実施した学年末 2021 年 1 月も緊急事態宣言発令中（兵庫県）という特殊な環境の中での 1 年間であった。遠隔授業を基本としつつ、感染状況に応じて授業計画の変更を余儀なくされることもあり、学生からは「やはり対面で授業を受けたかったという気持ちが一番大きい」という声も聞かれた。

このような厳しい学習環境下にあったが、学生は前向きに学び続け、テーマ「グローバル社会への理解を深める」のもと本講座「異文化理解教育」は入門期の 3 つの到達目標を達成することができた（図 1 1, 1 2, 1 3）。最終調査では、今後も異文化を学び続けたいという意見が多数見受けられ、面接授業に相当する教育効果を得たと言える。

本稿執筆中の 2021 年度スタート直前時も、新型コロナウイルス感染症の収束は見通せない状況であり、大学における授業形態は随時検討されることが推測される。さらに講座 2 年目の実践を通して、初年度との変化を検証しグローバルな社会への理解を深める異文化理解教育を推進していきたい。

## 参考文献

- ・文部科学省 小学校学習指導要領（平成 29 年）
- ・文部科学省 中学校学習指導要領（平成 29 年）
- ・文部科学省 教育職員免許法及び同法施行規則（平成 28 年、平成 29 年）
- ・神戸市教育委員会 神戸市教育課程基準（平成 31 年）

- ・文部科学省 『遠隔授業等の実施に係る留意点及び実習等の授業の弾力的な取り扱い等について』  
事務連絡（令和2年）
- ・原沢伊都夫 グローバルな社会を生きるための異文化理解入門 研究社 2018